



# 「忠臣蔵三百年」48番目の義士 菅野三平重賞①

はじめに

歴史的に有名な赤穂浪士の討ち入りがあつた元禄15（1702）年から、まもなく300年になるうとしています。これに伴い「赤穂浪士」関連のさまざまな書物が多く出版され、テレビドラマでも放映されるなど、「忠臣蔵」ブームが訪れています。そこで、箕面生まれ箕面で生涯を終えた「48番目の義士」菅野三平を取り上げ、その一生について再検討してみたいと思います。

今回は、初回ですので三平について概略を述べます。  
三平の父「菅野重利」は、旗本「大嶋家」に仕える武士で、大嶋家の所領「椋橋庄」（現豊中市大嶋町）の代官、母は菅野の庄家「藤井家」から嫁いできた「小まん」でした。延宝3（1675）年、重利の三男として誕

生し、13歳まで芝刈（現菅野3丁目）で育つた三平は、伝えられるところによると、父の主君、大嶋義近の推挙により播州赤穂の浅野内匠頭あきののたくみのなまの中小姓として、召し抱えられることになりました。

元禄14年3月14日、江戸城松廊下で内匠頭が刃傷沙汰にんじょうさたを起こしたとき、事件の第一報を伝える使者として、早駕籠かかごで赤穂へ向かつた三平は、西国街道に面する菅野の生家の前で母の葬儀に出会いましたが、駕籠を降りずにそのまま赤穂へ向かつたことが有名な話として伝わっています。

赤穂城明け渡しあきわたのあと菅野の実家へ帰り、仇討ちあだの時を待っていました。父重利が三平を推挙した大嶋家に迷惑がかかることを心配して反対したため、父への孝行と主君への忠義の板挟みとなり、悩み抜いた末に同士の討ち入りより12カ月前（こ



▲菅野三平旧邸（長屋門）

の年は8月が閏月うるすげで2回あつたの元禄15年1月14日、芝村の自宅の長屋門で切腹し、27歳の人生に終止符を打ちました。長屋門は府の史跡に指定され、現存しています。

吉良邸よしらのに討ち入り後、大石内蔵助おおいしが「三平が生きていたならば、当然この一挙に加わっている忠義の者」と語つたのを始め、三平の死が同士を裏切つたのではなく、逆に仇討ちの結束を強めることになつたことから、三平は「48番目の義士」と呼ぶ人や討ち入りに参加した46人に寺坂吉右衛門を加えた「赤穂四十七士」から吉右衛門を外して三平を加え、四十七士とする人もあります。

歌舞伎や文楽などの「忠臣蔵」の「お軽」との恋物語で有名な「早野勘平」が、三平をモデルにしたといわれることや、過去に放映された映画やドラマに登場した三平が、お芝居の勘平と現実の三平が入り混じつた、誤つた内容で紹介されたことにより、多くのかたの認識が間違つた三平像を持つておられるようです。本当の三平像を紹介するとともに、いくつかの興味深い新しい事実も明らかにさせてきましたので、次回から具体的な内容について述べていきたいと思ひます。